

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32622

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19188

研究課題名（和文）胆道閉鎖症患者の療養生活の整えを支えるケアガイドラインの有用性と活用課題の検討

研究課題名（英文）Examining the usefulness and problem related to clinical utilization of nursing care guideline for biliary atresia survivors with their native liver to organize daily lives

研究代表者

平塚 克洋（Hiratsuka, Katsuhiro）

昭和大学・保健医療学部・講師

研究者番号：30802475

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：「臨床現場の看護専門職者によるケアガイドラインを用いた看護実践」を経て「ケアガイドラインの有用性と活用課題に関するインタビュー調査」を行った。結果から、医師を含む他職種でのチームビルディングや病院システムを巻き込む組織的運動を視野に入れ、ケアを担う看護職者だけでなく、組織全体に有用性を提示することで、ケアガイドが“良い・有効”の評価に留まらず、“使える・使われる”という実装アウトカムに繋がる可能性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究で開発した『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』について、看護職者によるケアガイドの活用で得た実践知から、ケアガイドの有用性と継続的活用への課題を明らかにした。この成果により、開発や効果検証に留まることが多い研究によるガイドライン等の社会実装における課題解決や臨床現場と研究を往還した新しい成果の創造に繋がる可能性が示された。

研究成果の概要（英文）："Nursing practice using care guidelines by nursing professionals in clinical settings" was followed by the completion of "Interview survey on the usefulness of care guidelines and issues in their utilization," and the results were analyzed. The results showed that the care guidelines should be evaluated not only by the nurses who provide care, but also by the organization as a whole, with a view to team building among other professions, including physicians, and an organizational movement involving the hospital system, so that the care guidelines can be evaluated not only as "good and effective," but also as "usable and used, The results confirmed the possibility that the Care Guide could lead to an implementation outcome of "usable and used" rather than just "good and effective."

研究分野：小児看護学

キーワード：小児看護 胆道閉鎖症 思春期 青年期 ケアガイドライン 社会実装 セルフケア トランジション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

胆道閉鎖症は、小児期に発症して外科的手術を施されても尚、成長過程において常に肝移植を要する可能性があるという特徴的な経過を辿る小児外科疾患である。また、日本では、肝移植のほとんどが両親いずれかをドナーとする生体肝移植であり、脳死移植が主流の欧米と比して、世界的に特殊な状況にある。肝移植を受けていない自己肝にて生存する胆道閉鎖症患者(以下、自己肝生存患者)について、海外の報告では、常に付き纏う肝移植の可能性による心理的影響、quality of life の低さが指摘されてきた(Lind et al.,2015)。しかし、肝移植医療の相違もあり、日本の臨床現場で活用できる具体的なケアの示唆は、依然不足している。

申請者らは、近年、自己肝生存患者が、療養生活や体調管理の不確かさを感じ、生体肝移植ドナー候補である親との関係にも思い悩む中で、自立した生活を築く難しさがあることを明らかにした。一方、患者の親は、生体肝移植ドナーになる不安を抱えながら対処パターンが限られ、療養の責任を患者の自主性に委ねることに心理的な抵抗があることも明らかになった(Hiratsuka et al., 2017)。これらの問題によって、患者が自ら療養生活を整えるという思春期・青年期の課題達成が阻害され、不要な肝移植治療への移行、生体肝移植への準備不足等に繋がる。また、看護専門職者は、ケアの方向性や介入を開始する時期を見出すことに苦慮していた。そこで、介入開始の時期を含め、ケアの方向性を具体的に示唆できるガイドラインを、臨床現場の看護専門職者に指針を提示する必要があると考えた。

以上の背景から、申請者は、患者が生活を整えながら肝移植の可能性に対処していく過程を支えることを目指した、『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』の開発に取り組んだ(2017~2018: 研究活動スタート支援 17H07104)。ケアガイドライン開発のプロセスでは、臨床現場の看護専門職者の意見からケア内容の妥当性を確認し、介入開始の時期の示唆、スタッフ教育への貢献等、ケアガイドラインを用いる利点も明らかになった。しかし、実際に自己肝生存患者とその親が抱える問題の解決に寄与するには、臨床現場で継続的にケアガイドラインが活用されることが肝要である。ケアガイドラインの継続的な活用には、使用が想定される臨床現場において、有用性を検討すると共に複雑な臨床現場での活用のための課題を明らかにして、実践的活用の示唆を得る必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究では、先行研究で開発した『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』について、有用性と継続的活用に向けた課題を検討する。

このケアガイドラインは、思春期・青年期患者が生活を整えながら肝移植の可能性に対処していく過程を支えることを目指して開発した。“療養生活を整える”とは、単なる療養行動(内服や生活制限の遵守)だけでなく、学校や社会を含めた患者の生活全般における疾患に関連する事項の管理・調整の遂行である。思春期・青年期の自己肝生存患者と生体肝移植ドナー候補でもある親を対象に、複数のアセスメントと達成目標・ケア計画で構成した。また、先行研究でセルフケアへの影響が示唆されている親子相互作用を軸として、構成要素の洗練や使用方法の図式化を行い、ケアの具体的な内容と介入を開始する時期を示した(表・図)。これにより、臨床現場で実際に活用を開始するための準備が既に整っている。

表 ケアガイドラインの構成要素

構成要素	内容と根拠
ケアガイドラインの意図	ケアガイドラインの目指すところ、対象者、実施者、実施のタイミングを提示する。 研究1*の対象者の背景、成果、文献検討の統合によって作成した。
身体・生活状況に関するアセスメント	医学的な身体状況や日常生活における自己管理など、研究1の成果を補完する、患者の身体・生活状況に関するアセスメントの項目と指標を提示する。 医学文献、トランジションに関する文献検討より抽出した。
療養生活の整えに関するアセスメント	患者、親、親子相互作用それぞれについて、患者自らが療養生活を整えることを目指すためのアセスメントの枠組みを提示する。 研究1の成果である3つのプロセスを構成する、カテゴリー、概念より抽出した。
達成目標・ケア計画	患者、親、親子相互作用それぞれについて、患者自らが療養生活を整えることを目指すための目標と、そのためのケアの方策を提示する。 研究1の成果、文献検討の統合によって抽出した。

\* 研究1は、思春期・青年期胆道閉鎖症患者とその親の療養生活を質的に分析した、基盤となる1次研究を指す。

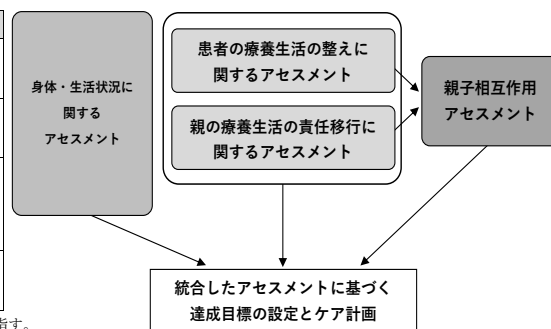


図 ケアガイドラインを用いたアセスメントと看護計画の流れ

本研究では、経験豊富な看護専門職者による活用を通して、ケアガイドラインの有用性と活用課題を検討する。これまで多くのガイドラインが開発されてきたが、臨床現場での有効かつ継続的な使用が課題となっている。今回は、経験豊富な看護専門職者が実際にケアガイドラインの活用で得た知識や判断、すなわち実践知から、臨床現場で日常的に取り入れ、ケアの質向上に作用するかという有用性、評価時期や活用者の負担感等の継続的活用への課題を検討する。この方法によって、臨床現場の実情に合わせた工夫が可能になると考える。また、小児外科や移植外科での臨床経験をもつ申請者が、臨床現場の看護専門職者と協同し、ケアガイドライン活用における支援・相談の役割を担う。研究と臨床現場を横断しながら、ケアガイドラインの実践的活用について究明していける点も、本研究の特色である。

開発したケアガイドラインを臨床現場で継続的に活用できれば、自己肝生存患者が療養生活を整えながら、肝移植への心理・身体的な準備性を高めることに繋がる。それにより、自己肝での生活期間の延長や、不要な肝移植治療への移行や再移植などの問題の抑制が望まれるという意義がある。

### 3. 研究の方法

本研究では、ケアガイドラインの有用性と継続的活用に向けた課題の検討を目的に、以下の計画で研究活動を進めた。

#### (1) ケアガイドラインの有用性と活用課題に関する文献検討

##### 【方法】

ケアガイドラインの継続的活用に向けて、有用性と活用課題に関する国内外の文献を検討する。検討内容は、既に活用されている他の疾患患者のケアガイドラインの効果、評価方法、対象者・使用者、それらに関連した臨床現場での活用について課題克服の工夫等である。

#### (2) ケアガイドラインの活用に関する説明・検討会

##### 【方法】

ケアガイドラインの使用者となる看護専門職者、活用する部署の責任者を対象に、ケアガイドラインの使用目的・方法に関する検討会を開催する。申請者から使用目的・方法について説明すると共に、各自の部署での活用に関する意見を、双方向的に聴取する予定である。

##### 【対象】

看護専門職者と、所属部署の責任者である。具体的には、臨床経験が5年以上で、胆道閉鎖症患者と家族の看護に豊富な経験を有する看護師、看護師免許を持つレシピエント移植コーディネーター等である。

#### (3) 臨床現場の看護専門職者によるケアガイドラインを用いた看護実践

##### 【方法】

ケアガイドラインを用いて、“患者の療養生活の整えを支えるケア”を看護専門職者によって実施する。“患者の療養生活の整えを支えるケア”とは、療養生活における患者の認識と行動の変容をもたらすために看護専門職者が提供する、疾患や治療に関する知識や意識、意欲に働きかける相談面接やアドバイス、指導等を主に指す。生活上の認識と行動の変容を評価するため、3～6ヶ月という中長期的な期間を想定している。

ケアの対象は、思春期・青年期(15～20歳代)の自己肝生存患者とその親である。

##### 《研究者の立ち位置》

申請者は、支援・相談者として、ケアを実践する看護専門職者の支援を行う。使用方法、使用の適切性等を経時的に検討し、開発者としての責任を果たす。また、直接的な活用者とならないことで、ガイドラインの客観的な有用性、課題を見出すことができると考える。

#### (4) ケアガイドラインの有用性と活用課題に関するインタビュー調査

##### 【方法】

活用期間の終了後、看護専門職者を対象にインタビュー調査を行う。インタビューは質的分析を行い、実際にケアを提供した看護専門職者の実践知に基づき、ケアガイドラインの有用性と継続的活用に向けた課題を検討する。主な内容としては、日常的なケアに取り入れることができるか、ケアガイドラインの活用がケアの質向上に作用するか、ケアによる対象者の変化、評価時期の適切性等を想定している。

##### 【対象】

(2) ケアガイドラインの活用に関する説明・検討会に準ずる。

#### 4. 研究成果

「臨床現場の看護専門職者によるケアガイドラインを用いた看護実践」を経て「ケアガイドラインの有用性と活用課題に関するインタビュー調査」を行った。先行研究で開発した『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』の有用性について4つのカテゴリー、継続的活用について4つのカテゴリーを生成した。

##### (1) 『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』の有用性

『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』を活用することにより、[患者の生活調整への効果実感]、[スタッフの意識改革]、スタッフの意識改革を背景にした他部署連携]、[ケアガイド活用に有効なチームビルド]という4つの有用性のカテゴリーが生成された。

ケアガイドを用いた看護実践を担った看護者は、ケアガイドによって、対象者に的確なタイミングでのケアがもたらす変化に気づく等、ケアガイドを活用することで、患者の生活調整に関する効果を実感したり、活用によって、ケアそのものへの意識が向上する体験をしていた。また、ケアガイドを活用する中で、他部署との連携意識が芽生えたり、有効に活用するためのチームビルディングがなされる等、ケアそのもの以外への副次的な有用性を実感していた。

##### (2) 『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』の継続的活用における課題

『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』の継続的活用において、[肝移植の可能性・親子関係への介入困難]、[業務ひっ迫による制約]、[組織への浸透不足による介入の中断]、[チームの継続・拡大の負担感]という4つの課題のカテゴリーが生成された。

ケアガイドを用いた看護実践を担った看護者は、生体肝移植や妊娠・出産に関する問題等への介入の難しさから、ケアを先送りせざるを得ない改めて実感したり、そのような問題に介入するケアの難易度と業務ひっ迫によって、ケアガイドを継続的に活用することは困難であると感じていた。また、活用を継続しようとする中で、他部署との連携不足によって継続的な介入が中断されたり、チームビルディングや後進の育成が負担になることを感じていた。

##### (3) 『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』の有用性を最大化し、課題を最小化する戦略

自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者について、患者の状態が安定している場合、親が療養生活を主導する現状維持を暗に望む患者・家族と、患者のセルフケアを目指す看護師との間に目標設定のギャップがあったことが、看護者からのインタビューからも明示された。ケアガイドの活用を契機に、患者・家族との目標設定のオープン化を図ること、親子の関係性に介入することが難しくなる思春期以前から計画的な介入を開始することが、ケアガイドの有用性を高められると考える。

ケアガイドの継続活用には、多忙な臨床現場において、業務時間や業務量、実際にケアガイドを活用するスタッフの勤務調整等の現実的な課題があり、その解決がまず必要であった。さらに、医師を含む他職種でのチームビルディングや病院システムを巻き込む組織的運動を視野に入れ、ケアを担う看護職者だけでなく、組織全体に有用性を提示することで、ケアガイドが“良い・有効”の評価に留まらず、“使える・使われる”という実装アウトカムに繋がる可能性が確認された。

先行研究で開発した『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドライン』について、看護職者によるケアガイドの活用で得た実践知から、ケアガイドの有用性と継続的活用への課題を明らかにした。この成果により、開発や効果検証に留まることが多い研究によるガイドライン等の社会実装における課題解決や臨床現場と研究を往還した新しい成果の創造に繋がる可能性が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hiratsuka Katsuhiko, Nakamura Nobue, Sato Naho, Saito Takeshi	4. 巻 61
2. 論文標題 How Parents of Adolescents and Young Adults with Biliary Atresia Surviving with Native Livers Transfer the Responsibility of Medical Treatment to Their Children in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Pediatric Nursing	6. 最初と最後の頁 115 ~ 121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pedn.2021.05.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平塚 克洋	4. 巻 44
2. 論文標題 自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくプロセス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6. 最初と最後の頁 73-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15065/jjsnr.20200805098	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平塚克洋、中村伸枝、佐藤奈保
2. 発表標題 思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイドラインの開発
3. 学会等名 第32回 日本小児看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平塚克洋、中村伸枝、佐藤奈保
2. 発表標題 思春期青年期の胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくためのケアガイドライン開発 肝移植後のより良い生活を見据えて
3. 学会等名 第38回 日本肝移植学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平塚克洋、濟陽寛子
2. 発表標題 思春期・青年期の胆道閉鎖症患者の療養生活の整えを支えるケアガイドの有用性と活用課題の検討
3. 学会等名 第71回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------